

# 令和6年度 第67回 関東高等学校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

5月25～27日までの3日間(開会式は24日)で第66回関東高等学校サッカー大会が千葉県各所で開催された。

大会は各都県予選1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとし、それぞれトーナメント方式で実施された。Aグループの1位を優勝、2位を準優勝とし、準決勝で敗退した2チーム及びBグループの1位を3位とする規定がある。埼玉県からは県予選の結果、Aグループに正智深谷高校、Bグループに東京成徳大深谷高校(以下成徳深谷で表記)が出場した。今回は視察した埼玉県勢の試合を中心に大会を振り返らせていただくことにしたい。

正智深谷高校は初日に白鷗大足利高校(栃木県)と対戦して3-0で勝利したものの、続く準決勝での大成高校(東京都)戦では0-3での敗戦となり、3位という位置づけで今大会を終えた。

白鷗大足利戦では、立ち上がりから正智深谷高校が相手の背後を狙ってボールを送り込み、試合を優勢に進めた。開始早々の4分には相手を押し込んだ状態でクリアボールをゴール正面で回収したSB⑭鹿倉が放った強烈なミドルシュートがゴール隅に突き刺さり、先制に成功する。正智深谷高校はその後もピッチを広く使いながら長短織り交ぜたパスでボールを保持し、白鷗大足利高校にボールの奪いどころを定めさせない。ロングボール主体のカウンター狙いとなった相手に対し、正智深谷高校はリスクマネジメントが安定しており、チャンスらしいチャンスを作らせない。30分にはオフ・ザ・ボールで背後をとったFW⑪中島が冷静にネットを揺らし、追加点をあげる。後半も相手の戦い方に変化はなく、69分に追加点をあげたところで残っていた2人の交代枠をすべて使いつつ、終盤まで集中力を切らさずに初戦を完封で勝利した。

連戦を考慮してか、正智深谷高校は準決勝の大成高校戦において前日の先発2名以外を全て入れ替えるターンオーバーをして試合に臨んだ。ボールの保持率としては相手が上回るなかで正智深谷高校は思うようにボールを動かさず相手の背後にボールを配球する単調な攻撃が目についてしまった。大成高校は前日の日大明誠高校(山梨県)戦で延長戦までもつれ込む試合展開となったが、正智深谷高校とは対照的にGK以外はすべて同じメンバーでこの試合に臨んだ。疲労の残る相手に対して正智深谷高校が80分を通してほぼリズムを掴むことができなかったことから、今後に向けては通常のリーグ戦を含めて控えに回ることが多い選手の奮起が期待される幕引きとなった。

第2代表としてBグループトーナメントに出場した成徳深谷高校は、初戦の東海大甲府高校(山梨県)に4-0で快勝し、準決勝の前橋育英高校(群馬県)戦では1-1からのPK線をものにして決勝へ進出を果たした。決勝では横浜創英高校(神奈川県)の前に0-3で敗れ、3位入賞とはならなかった。

東海大甲府高校戦では、お互いに縦に早い攻撃を特徴とするゲームとなったが、攻守にわたって終始成徳深谷高校の出足が上回った。競り合いやセカンドボール回収率、決定力といった部分で相手を圧倒し、完勝と言える内容で準決勝に駒を進めた。

互いに初戦を完封し、早めの時間帯に交代カード5枚すべてを使用して余力を残して臨んだ前橋育英高校戦では、Bトーナメント屈指の強度の高いゲームとなった。成徳深谷高校は初戦と同じく縦に早いゲームを指向。対する前橋育英高校も、初戦の佐野日大高校(栃木県)戦ではボールをしっかりと保持しながら横に揺さぶる場面が多かったのに対し、強度の高い守備をする成徳深谷に対して早いタイミングで縦

にボールを入れるシーンが多い試合展開となった。中盤で目まぐるしく攻防が入れ代わるなか、53分にオウンゴールから先制点を献上してしまう。しかし、成徳深谷は焦れることなく球際の強度にこだわって愚直に相手ゴールを目指し、後半アディショナルタイムにペナルティエリア中央でMF⑦藤村が粘ったこぼれ球に対し、何度も左サイドを駆け上がっていた2年生SB⑤山谷が豪快に蹴り込んで起死回生の同点弾をあげることに成功した。延長戦に入っても最後まで互いに勝ち越し点を狙いにいき、試合を通じて両チーム合わせて21本を数えるシュート数となったが、両GKともに素晴らしい集中力とシュートストップを見せ、追加点を与えず。試合はPK戦に委ねられ、5人のキッカーとも素晴らしいコースに決めた成徳深谷が決勝進出を果たした。

決勝戦当日は強い風に雨が混じる中での試合となった。スリッピーなピッチコンディションのため、立ち上がりは互いにビルドアップ時に無理をせず、早めに相手の背後をつく展開となる。前半半分を過ぎたあたりから横浜創英高校がワイドレーンを使ってクロスまであげる場面を増やすが、精度を欠き、フィニッシュまでは至らずにスコアレスのまま後半へ。後半に入ると選手交代によって活性化を図る横浜創英高校がスピードに乗ったドリブルと小気味良いショートパスで成徳深谷を揺さぶり始める。すると横浜創英高校は57分に自陣でカットしたボールを一度左へ展開し、最後は交代で入ったばかりのSB⑭河井が右サイドから駆け上がり冷静に流し込んで待望の先制点をあげる。疲労のたまっていた成徳深谷高校は出足が鈍くなり、67分にはDFとGKの間に出たボールの処理がもたついたところを突かれて追加点を奪われ、71分にもCBがボールをカットされてしまい決定的な3点目を与えてしまう。何とか追いつきたい成徳深谷高校であったが、このままタイムアップ。決勝で涙を呑む結果となった。結果として3日連続の大会形式のなかで選手の疲労が顕著に出るかたちとなったが、登録選手中半分以上が2年生ということもあり、今後の成長が楽しみである。